

2013年3月21日・週刊きたかみ「文芸」欄では

尽きない思いをそのままに

『連結詩 うねり 70篇 大槌町にて』を上梓

大槌町出身、現在鬼柳町在住の東梅洋子氏が『連結詩 うねり 70篇 大槌町にて』（コールサック社）を刊行した。奥付は2013年3月11日とある。あの大津波により、故郷・大槌町の街ごと奪われた無残な姿を思い、親しい人々との冷酷な別れに、優しい言葉で語りかける。鎮魂というより、いまも東梅氏には、そこにあるはずの存在すべてに寄り添っているようだ。氏自身、昭和35年5月のチリ地震津波を体験。悲劇と人間の心の温かさを周知している。だからこそ、生きていた声を求め、あったはずの日常風景を探し続けて、言葉が生まれてくるようだ。

東日本大震災そして大津波。直後の2011年4月29日、手作り小冊子の「うねり」を私家版として発表。以後「うねり」を書き続け、そこから60篇と手作り詩集より10篇を選んで今回の詩集を編んだ。

北上詩の会が2011年5月4日、詩歌の森公園で行った「詩の声を 東日本大震災復興へ」の朗読会で、参加詩人が「うねり」を群読した。悲しみのあまり、東梅氏が言葉を失ったのを覚えている。「私の愛した人達
そして故郷 側におりますか 今日はその日と同じ 真白い雪の花がまっています（略）」とあしがきの冒頭にある。愛するものの喪失の強烈さと、その絶望を持ち続け、なお求めねばならない心の、いわば至上の愛を感じさせる詩篇だ。

と紹介されています。